

令和3年度文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）

通し 番号	1	事業区分： 劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業
		助成対象団体名： 公益財団法人サントリー芸術財団 施設名： サントリーホール
<p>助成対象活動に関する評価 （妥当性）</p> <p>サントリーホール自らが定めたミッション、ビジョンと事業計画の整合性については明確で、これらの達成に向けて事業が適正に組み立てられていると認められる。</p> <p>事業計画は「歴史を刻む～名演との出会い」として創造的で音楽的クオリティの高い試みを、「未来を育む」として教育・普及活動である鑑賞機会の拡大と若手演奏家の育成・支援という2項目にカテゴライズされており、それぞれに成果が現れた事業が展開された。事業計画に必要な構成要素が有機的に関連し、当初の予定どおりに事業が推進されたと認められる。加えて、近隣の文化施設、商業施設などと連携した音楽祭や、学校教育と連携して小学生を対象としたプログラムを実施するなど、地域への還元を積極的に行っており、助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が認められる。</p> <p>（有効性）</p> <p>当該施設では10のアウトカム発現を目指して、目標と効果測定指標を設定している。目標の達成に向けて、事業は着実に推移していると認められる。</p> <p>多くの観客に鑑賞機会を提供するという目標、次世代の聴衆に向けた事業や裾野の拡大を目指すという目標は、平成30年度、31年度は平均入場者率75%の目標を達成したものの、令和2年度以降は新型コロナウイルス感染症の影響を受けたことで達成には至らなかった。しかしながら、鑑賞機会の減少を補うため、積極的にオンライン配信を進めたことにより、令和2年度以降も一定の鑑賞機会の提供が確保できた。</p> <p>人材育成の目標では、「オペラ・アカデミー」「室内楽アカデミー」が継続的に実施されている。また、世界への発信・日本のクラシック音楽発展を目指した事業企画の充実という目標では、「チェンバーミュージック・ガーデン」「サマーフェスティバル」などの継続企画に加え令和3年度新規事業「若き音楽家たちによるフレッシュ・オペラ」を実施した。</p> <p>地域社会に開かれたホールという目標では「オープンハウス」の動員数、「ARK Hills Music Week」の公演数などがおおむね達成されている。演奏団体や他館と協働するという目標では、水戸芸術館、神奈川県立音楽堂、そして東京文化会館との連携が実施された。</p> <p>平成31年度末より新型コロナウイルス感染症の影響を受けたことから、設定された指標に対する4年間での目標達成は難しい状況であるが、オンライン配信やリモートレッスンなど、新たな手法を積極的に取り入れ、その影響を軽減することに努めたことは特筆に値する。</p> <p>以上のことから、おおむね目標を達成し、一定程度のアウトカムの発現が認められる。ただし、目標、指標の設定及び整合については、再度確認が必要である。また、その達成状況についても検証を求めたい。</p>		

（効率性）

事業はほぼ計画どおり実施されており、事業期間は適切であったと認められる。

また、事業費については、要望時の予算額と報告時の実績額とを比較すると、一部の費目に増減があったものの、ほぼ計画どおり執行されており、おおむね適切であったと認められる。ただし、一部事業において過度の予算増減も見受けられるため、より正確な予算積算と執行を求めたい。

（創造性）

当該施設の中核をなす事業の一つとして、プロを目指す若手のための二つのアカデミーがある。「室内楽アカデミー」は我が国音楽界のリーダー的存在である堤剛館長自身が陣頭指揮をとり、指導者には東京クワルテット創設時メンバーや室内楽のベテラン奏者を配している。また、「オペラ・アカデミー」では、元世界的テノール歌手のジュゼッペ・サッパティーニを講師に配し、年間を通じて高水準の教育を行っているが、さらなる工夫も必要である。音楽と美術を組み合わせた事業「いろいろドレドレ」は、サントリー美術館との共催で実施した、3～6歳児を対象とした実験的な創造活動事業である。これらには、独創性、新規性が認められる。

「チェンバーミュージック・ガーデン」は、世界的に注目される日本では数少ない室内楽フェスティバルであり、小ホール公演にもかかわらずこの11年間の来場者は計62,000人を超えている。また、「サマーフェスティバル」は30年以上の歴史を持つ国内最大規模の現代音楽フェスティバルで、この分野をけん引する貴重な存在であり、ともに先導性が認められる。

「室内楽アカデミー」、「オペラ・アカデミー」の修了生は、国内外で活躍している。特に「室内楽」については、アカデミー修了者による「葵トリオ」が、2018年9月に第67回ミュンヘン国際音楽コンクールにおいて日本人団体として初の優勝という快挙を達成するなど、修了生に対する国際的な評価は高い。

「サマーフェスティバル」は、プロデューサー制により実施しており、日本の重鎮作曲家・一柳慧による「サマーフェスティバル2020」は音楽業界の1年を振り返る新聞評で2名の評論家からベスト3に選出されるなど、高い評価を受けている。また、「チェンバーミュージック・ガーデン2021」で開催した「小菅優プロデュース武満徹『愛・希望・祈り』」は音楽雑誌の2021年ベストコンサート10位に選出されるなど、当該施設の企画事業は毎年高い評価を受けている。

国内外の楽団はサントリーホールで演奏することを目標としており、「世界のクラシック音楽の殿堂」としての位置づけを確固たるものとしている。「アカデミー（研修会）」、「オルガンプロムナードコンサート」、「オープンハウス～サントリーホールで遊ぼう！」など、次代の演奏家や聴衆、音楽ファン育成に向けた事業は、レベルの高い内容のものも無料で行われており、社会包摂を考慮した取組も認められる。我が国の音楽専用ホールの代表格と言える。

以上のことから、事業内容が、独創性、新規性、先導性等に優れており、事業の実施によって、当該劇場・音楽堂等の国内外での評価の向上につながっていると認められる。

（持続性）

組織面では、非正規職員から正規職員への転換を進めており、組織体制の強化がなされ

ている。特に、事業制作部門に関しては、出向職員からプロパー職員への転換を進めるとともに、次世代育成という観点から5年間で20代、30代を積極採用して、専門性を高めている。財務面では、サントリーホールディングスとの密接な関係を基礎とした安定的な財政基盤が確保されている。

以上のことから、事業計画を通じて組織活動が持続的に発展し、持続的なアウトカムの発現・定着が期待できると認められる。

（総 評）

サントリーホールの事業計画「サントリーホール主催公演」は、妥当性、有効性、効率性、創造性、持続性において適切に進められていると認められる。

今後もサントリーホールが持つブランド力、世界最高水準の音楽を提供する発信力、グローバルな視野に基づいたオリジナルの企画力など、自らの強み・特色を生かし、「生活の中の楽しみとして音楽を根づかせ、人々がより豊かな人生を送ることに貢献する」「音楽文化の継承と発展に貢献する」というミッションを達成するための戦略的な事業展開に期待したい。